賀茂高等学校
同窓会 会誌 Vol.2

平成22年8月1日発行

賀茂高等学校 同窓会事務局
東広島市西条西本町16-22
TEL（082）423-2559

新任挨拶

賀茂高等学校校長
隠澤　浩雄

本校は今年度で創立百四年目を迎えます。その長い歴史の中で築き上げた伝統をバックボーンとして、地域社会の中で大きな信頼を得ており、多くの有為な人材を輩出しています。これからも東広島市のリーダー校としての責務を果たすべく、学校は、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成にむけて全力で日々の教育活動に邁進しております。

このたび本校における教育活動の成果が認められ、県教育委員会の学力向上対策事業の一環である、「チャレンジハイスクール」の指定を受けることができました。この事業は、明確な進路目標を持ち、本県の経済基盤を支える人材の育成を図る事を目的とした事業であり、高等学校入学時から卒業時にかけて学力の伸長状況、国公立大学合格者数比率等を審査基準とされた選抜により、県内で十校だけが指定を受けています。昨年度は指定を受けることができず、大変悔しい思いをしていましたが、生徒・教職員が、進路実現に向けて共に精進をし、他の地域の伝統校を押しのける事ができました。

学校の伸び率を評価されたわけですから、教職員一丸となって、全ての教育活動において、さらに磨きをかけて参りたいと思っております。今後とも、変わらぬご支援をお願いいたします。

随想「春の訪れ」

榎並（えなみ）　掬水（きくみ）

春の訪れといえば、先ずもって、肌を包み込んでくる暖の気配といえようか。

つね日頃にはさほど気にも留めることのない、首まわりとか衣装下に隠れた両脇のあたりとかに、この時節独特の、ほっとした暖気をほのかに覚えてくる。とりわけ、春先にヒュウとばかりに吹き抜けていく、いまだ冷え冷えとした一陣の風のあとなど、言いようもなくふわりとした微かな感触が、首筋どころにそっと忍び寄ってくる。心地よくてつい両掌をつかい、逃してなるものかといった気負いの様子で、その辺りに漂うものを覆い包もうと試みる。

春一番という名うての存在がもういっぽうにはあるものの、この暖気を向こうにまわしてはとうてい敵（かな）うものではない、と私は思っている。呼び名のとおり、瞬時にしてなお瞬発のものでしかない風分際にくらべて、暖はごく地道にいつまでも、纏わりついたまま身体から離れていくことはない。そうこうするうちにも、これまで身に重ね装っていたものを、一枚分脱ぎ捨てていく仕儀ともなる。そこら辺の日常ごとの変化もまた、私にはいちだんと春めいて思われる。

籠り気味の家から一歩二歩戸外へと踏み出したせつな、一瞬時にして身に沁みてくる気配は、なにものにも例えようがない。頬やら首筋やら、素肌部分にふわりとばかり襲ってくるものに、たちまち身も心も解（ほど）けてしまい、胸の襟を両側に大きく押し開いて、いっぱいいっぱいに受け止めたくなってくる。

つい、そのあたりまで、そぞろ歩きに誘われる。山裾に拓かれた団地うちの、わが家からほんの二百メートルも先に歩いていくと、道筋の取りようですぐさま山地へと分け入る。一メートル幅にも満たない、一面雑草に覆われた狭道が、山中奥深くにまで延びている。そこを辿って登っていくと、おのずと春が、向こうのほうから寄り添ってくる。

木々の香にほかならない。よくよく観察してみると、木々の新芽というものは、冬場のうちからはや吹きはじめている。空（から）っ風のなかを威勢よく、芽を宙に向かい、押し出していっている。たとえば辛夷（こぶし）など、萌芽の塊のとりわけ大づくりなものが散歩途中の目に立って、季の到来をそれと告げてくる。ほどなく春か、などと、ひとり頷き返しながら、山路をそぞろに歩いていく。

新芽の発する香りは、たいそう心地よい。あの生臭さのほどがよい。息衝いている気配がある。生き抜いている実感がある。生きものというものは、だいたいにおいて生臭い。生臭さのなかでも、いのちと思しい匂いがする。ある種独特の香ともいえようか。

迎春といえば、母校賀茂高校への入学の頃を思い出す。往時の高校の講堂のすぐ横合いには、こじんまりではあるが、桜並木があった。そこで、新入生歓迎の意も兼ねて、春爛漫のもと、一年生から三年生までの全クラス対抗による合唱祭が催された

―以下省略―

昭和三十二年卒業、随筆家
平成二十一年　日本随筆家協会賞受賞
主著　随筆集『移ろいのなかで』（ブイツーソリューション刊）

戦争と女学生時代を顧みて―「姫さゆり」の発行

高橋　繁子

賀茂高等女学校第二十四回卒業の私共は、今年傘寿を迎えます。この度私共が女学生として過ごした日々のこと、歴史の一端として認めさせて頂くこととなりました。昭和五年、六年生まれの私達は、昭和十八年四月大東亜戦争の真っ直中に入学し戦争と共に成長しました。入学して暫くたった頃から上級生の引率のもと勤労奉仕に出る様になり、二年生になった頃には勉強は第二で、農繁期には出征兵士の留守宅へ、田植え・麦刈り・稲刈りにと、あらゆる農作業に従事しました。当時十四、五才の乙女でしたが、戦争に勝つ為、「一億総動員」というかけ声のもと、一所懸命でした。三年生になる頃は、学校に沢山の家庭用ミシンが運び込まれ、被服廠学校工場となり学徒動員として、軍の管理のもと兵隊さんのシャツを流れ作業で毎日毎日縫いました。厳しい訓練のもとミシンも上手に使える様になり当時の女学生として、お国の為に役立てることは誇りであり、戦争に勝つ為には当たり前のこととして一丸となって頑張ったものでした。そんな日々の朝、登校中にB29が白い一本の線を残し乍ら広島方面に飛び去り、暫くして大きなキノコ雲……八月六日原爆投下でした。今でもあの光景は脳裏に焼きついております。そして八月十五日終戦、八月十七日被爆者救護の動員命令のもと、県立賀茂高等女学校救護班が編成され、広島市内にて救護活動に従事し、戦後の混乱期を経て昭和二十二年卒業しました。これが女学生として過ごした四年間でした。

時は流れて、五十年の歳月が過ぎた一九九七年、これまで堅く心の中にとざして語らなかった原爆救護を始め戦争の痛手を、このまま忘却の彼方へ押しやるには余りにもしのびがたく、何とか語り継ぎたいと同級生有志にて、小冊子発行の運びとなり、校歌の一節「姫さゆり」と名付けた文集を作成しました。思いの外立派な小冊子が出来、原爆資料館を始め賀茂高等学校図書室等にも贈呈させて頂くことが事が出来ました。

顧みれば戦前・戦中・戦後、貧しくて苦しかったけれど激動の時代を生き抜いた今、女学生の頃培われた友情と忍耐は、私共の人生の原点となったと思います。いろんな時代を乗り越えた賀茂高校、百年の歴史を踏まえ、これからも移り行く時代と共に賀茂台地に大きな根を張り、県立賀茂高等学校として誇りを持って発展してほしいと願うのみでございます。私共も平和な日々に感謝しつつ余生を全力で生きて行きたいと思っております。最後に卒業生の方々の更なるご活躍とご発展を祈念しペンを置かせて頂きます。

賀茂女広島支部長
賀茂女二十四期　昭和二十二年卒

高校入学後の半世紀を振り返って

樋高　義昭

高校入学（昭和三十三年）後、半世紀が過ぎたことになる。高校時代には、日本の経済もほぼ戦前の水準に戻り、戦後の高度成長が始まりかけていた。この時代はまだ物にも恵まれない不便な世の中であった。教室には寒い冬でも暖房はなく、しかも床下から冷たい風が吹き上げて来る木造の校舎であった。決して快適な環境ではなかったが、充実した高校生活であり、それが我々を強くしたと思う。先生からは知識以外に多くの人生の教訓を教わった。「人生はマラソンと同じだ、他の者より少々遅れていても後で追いつけば良い、諦めないで走り続けなさい」「失敗は成功のもと、恐れず挑戦しなさい」「どんなに難しい文章でも三十六回繰り返して読めば必ず理解出来る」等々、それらはその後の私の生き方に大きな影響を及ぼした気がする。

広島大学理学部の大学院時代に、私の一生の仕事となる燃焼化学に出会った。卒論研究、大学院の修士論文研究を通して、燃焼、爆発現象の魅力の虜になり、大学院博士課程に進学した。当時、理想の反応装置と考えられていた衝撃波管装置の組み立て、高温反応の研究をスタートさせる役割を与えられ、英語論文を頼りに、組み立て、測定実験を行い、日夜苦労をした。博士課程三年の春（昭和四十六年六月）、突如、愛媛大学理学部化学科への赴任の機会が与えられた。赴任後、高温高速反応研究の新技術に挑戦、世界でまだ一例しかない研究に取り掛かり、昼夜悪戦苦闘しながらデーターを取ることに成功した。この研究が認められ、吉田科学技術財団から渡航費・生活費の援助を受け、燃焼反応機構研究の第一人者であったガーディナー教授（米国テキサス大学）の下で一年半、研究するチャンスを得、昭和五十三年四月、妻と娘二人を連れて渡米した。教授の下で、化石燃料の燃焼メカニズムの基本となる炭化水素の燃焼反応機構の構築に着手・完成させ、その成果を論文として報告をしたが、この分野で世界のトップに立てたと興奮した記憶がある。この一年半の研究経験が、その後の私の約三十年間の研究の基礎となった。研究を通して多くの国の人を知り、多くの国を見ることが出来たが、これは私にとって幸運であった。

帰国後は、他に類を見ない衝撃波管装置の作製・研究を行い、渡米中に学んだコンピューター解析技術を駆使して解析し、燃焼反応機構を解明する研究に取り組み、夜十時近くまで学生さんと共に研究に明け暮れる日々を過ごすことになる。世界のトップを目指して新しいことに挑戦し、困難にぶつかり、挫折し、それを繰り返しながら十年近く掛けて成功した研究プロジェクトもある。学生さんもこの様な経験を通して忍耐強く、逞しくなってくれた気がする。卒論生は一年間、修士課程の学生は三年間、博士課程の学生は六年間、私の下で、先輩、後輩と同じ研究室で机を並べ、昼夜共に学び、共に研究をする。ある時には助け、ある時には助けられながら、苦労を共にし、自分を鍛え、同時に技術力を身につけてくれた。私が教えてきた行動の原点は高校生時代に教えて頂き学んで来た生き方、知恵、アドバイスにある様な気がする。感受性に富み血気盛んな時期に、恩師の思い・生き様、これから長い人生を歩むであろう生徒に伝えようとされた言葉が心に残り、人生の中での節目、行き詰った時、苦しい時、それを思い出し、再度勇気を与えられ歩み始めた気がする。多くのことを教えて頂いたにもかかわらず、恩返しが出来ないまま今に至った事を後悔するこの頃である。

昭和三六年賀茂高校卒業
国立大学法人　愛媛大学名誉教授
環境機能科学専攻　理学部　燃焼化学　理学博士